

はお辨當の叱言などは一遍も云つたことはないとか、絹の着物などは一度も着たことはなかつたと云ふが、併し子供の時は、おいしいお菜があつた時非常に嬉しかつたとか、よい着物を着せられた時に雀躍をして、まづい着物を着てお友達の中に入つた時、涙ぐんだことがあるとか云ふことは忘れてしまつて、自分が年をとつてからそんな境界を超脱してしまつてから、自分の都合のよい様なことばかり云つて冷酷に子供を観ると云ふことが、稍もすると起るやうである。お婆さんが嫁などに對して、自分が一生の間に茶碗一つ壊したこ

とがない様なことを云つて居る、やはり正直な處は、いくつも壊したに相違はないのである。畢竟人を導くとか、育てるとか云ふ時に、只智一方で論理で行かうとするのは普通の人の稍もすれば陥る弊であるが、ほんとの生きた教師、ほんとに感化力のある親と云ふものは、先づ情で觀、同情の涙から溢れてくる教訓に由つて、始めて子供を發奮させるものであると思ふ。それで畢竟觀察の唯理的方面と共に、同情的方面を尊重せられんことを希望した次第である。(談文責在記者)

國 民 祭

(フレイベル會二月例會に於ける講演)

東京女子高等師範學校教授 文學士 垣 内 松 三

一

我々は上代文化の研究上原始的民族の言語文學

美術等と、子供のそれ等との發達を比照して、研究の資料とするのを常とする。これはいづれも、

多少似たところがあるからである。尤も今日は國民祭といふ社會的方面についてお話をしたいと思ふのであるが、若し心理的方面から見ると、兒童研究の方面にも多少の参考となれば、誠に幸である。尙ほもう一つ申上げて置きたいのは、本年諒闇に當つて我々は、多くの祭日を經驗したが、これまでの祭日の記憶と對照して淋しみを感じた。そしてこの祭日は只あたりまへの日と同じに夜があけて日が暮れたまでであつた。して見ると、即ち祭日といふものゝ氣分は心理的のものであつて、この氣分は「日」を遊離して考へ得らるゝものであるといふ經驗を得た。今日はこの祭日の氣分を捉へて提出しようとするのであるが、それと共に國民一般にわたつて居る氣分は國民教育上如何なる意味を有するものであるか、またその中に於ける子供には、どんな感じを興ふるものであるか、こゝにいふ問題を考へて見たいと思つて、この題を掲げたのである。一體國民的享樂といふ術語は、獨逸の文

獻學では前から用ゐたが、我が國從來の學者は之れを、年中行事といつた。但し月々の祭に就てその一々の起源沿革を考證するのみで、科學的には研究されて居ない。たゞこれを分類して、朝廷柳營、民間の年中行事の三種として、この一部々々に就て研究を試みて居たが、併し實はこのやうな三種の別をなし得可きものではなく、ある祭はこの三階級に渡つて行はれて居るのもあり、又その一部にだけ痕跡を残して他は消滅したのもある。即ちともかくも國民心理の間に生き得たものだけが、生き残つて後にまで行はれたのであるから、自分はその意味で、自分の學問系統に於て、此くの如き文化の一表現を引くるめて、『國民祭』といふ名を附して居る。

國民祭の話をするには、祭の起源、發達、傳播に分つのが自然の順序である。まづその起原から始める。

祭の起原は各民族によつて同じくない。同じく

ないのは大抵その住んで居る自然即ち、山、海、野原等の影響や、またその民族の作つて居る特殊の社會組織によるのである。然し、その原因はどうあつても、祭は年々行はれるにつれて、次第に嚴肅莊重を加へて遂に『國民祭』となり、またそれと共に他の一面には、遊戯娛樂の氣分が漸次發達するのが常である。

日本の國民祭は、大體に於て家の祭であるといふ特色を帯びて居る。家の祭といふものが起る必要條件は家の族員の團結といふことである。而して此の團結のもととなるものは火の發明である。日本に於ても火は、始めは世界の古い民族のするやうに鑽つてつくつたのであつた。火が出来てから今まで生食をしてをつたものが、煮る焼く蒸すといふ様になつて、料理法が一變してこゝに於て一定の食物を調理してそれを同時にたべるといふ事が始まつた。而して、食時の定つたことが人間の生活に、勞働の時間と、休息の時間とを鮮明に

する原因になる。古い文獻に朝餉あさけ、夕餉ゆふけといふ語があるのを見ると、朝夕二度の食時が明らかに定まつて居たのである。即ち朝の食事の前後、夕食の前後によつて、勞働と休息との區別が出来たと思はれる。ともかく今までは、日の出入、月の盈虧で時間を計つて居たのが、それよりも、食時によつて、もつと明かに人生に時間の觀念がおこるもとゝなるのである。

朝の食事に於て第一にするのは朝あさ、まま、つつりり、ごご、ととであつた。又日本の上代の民族は農業と狩獵とに従事して居つたと思はれるので、晝は山野で勞働して、夜は歸つて休む。この夜の食事に、また多くの祭が行はれる。夜は朝の祭政とは違ひ、餘興が伴ふ。又この時に家の老人が子供に昔の事を話してきかせる。彼の今日に残つて居る神話傳説などは、この子供に對する老人の話がもとであると思ふ。これは外國でも同じであつて、かくして童話や、お伽噺が出来てくるのである。又此の時に簡

單な音楽、舞踏も始まるのである。一體日本の祭や儀式には夜行はれるものが多いが、これは國民の文化を調べるうへに逸してはならぬ大なる資料となる。而して朝一定の祭をして神に祈願し、夕に祝福を感謝する一日の祭が時代を経るに従つて毎朝夕ではなくて、旬じゆんになり、朔さくになり、節せつになつて茲に『祭の暦』なるものが出来るやうになつたのである。

祭の暦の出来る原因は、人事に伴ふ結果であるが、もつと有力な原因は自然の影響である。日本人は農業の民で牧畜の民とは異り、多く野外に晝出て働き、夜は外に出でずして内に居る。従つて既に人も知つてゐる通り星、月などは日本の神話文學には出ない。而して祭に於て、農業に關した一定の季節の影響が著るしく現はれて居る。即ち播種、收穫の二大時期の影響であつて、この季節が中心になつて祭の暦が出来る。これに就て少しく「年」といふ言葉の解釋をいふ必要があるが、本居

宣長翁は年といふのは種を植ゑてからとり入れるまでの間をいふのであると、謂つて居る。語形の解釋は誤つて居ると思ふが意味はこれで大體よいと思ふが、さうすると一年の間に時間の空虚が出来る。これについて此頃外國人の中に一年を三百六十五日といふのは支那の暦であつて、日本の上代では一年を三百六十五日とは思はなかつたのであらう、歴史に録してある天皇の寶算から研究しても、仁徳天皇以前は一年を三百六十五日とせず今の一年を二年としてをつたので即ち春分から秋分まで一年、秋分の次の春分まで一年として居たのではないかといふ説も出て居る。歴史家の方からも、古くから干支が十運り位違ふといつて居るのとよく合つて居る。もしこの説が當つて居るとすると宣長翁の説よりも一層明瞭になる。さうすると大體種まきからとり入れまでを一年、とり入れから種まきまでを一年としたやうにも解せられる。ともかく農業國であるので祭の中では、

種まきが一年の始めの方の最も重なる祭の一日、收穫の時が終の方の主なるものであつて、この二大時期を中心とした祭が行はれて居る。かういふ風にして一年中に一定の祭の時が出来た。これが祭の曆の土臺となるのである。

斯くて一方に先づ春祭りといふ日本中に今も廣く行はれる祭の風が起る。行事には種々あつて種子を下ろす時に色々神に今年の豊作を祈る。又それに餘興が加はる。彼の三四月を通じて各地に行はれる希望と、觀喜にみちた賑やかな春の祭は、この祭の曆の始めの部分に總括せられ得るのである。祈年に類似したのも、古社又は民間に行はれて居る。次に春祭の終る頃から今年は豊饒だろうか、どうであらうかといふ事が心配になつて、それを神意を聞くのが原因となつて、こゝに一團の祭が起る。この神意を聞く方法は即ち彼の占である。その中で特色のあるものを例にいへば、たとへば大綱をつくつて兩方から光をひいて勝つた方の村

が豊年だとする。これは大分廣く行はれた。又石打などいふものもあつた。石をうちあつて勝ちしものが實るといふのである。又喧嘩祭といふものもあつて、あらゆる力を出して喧嘩をして、勝つた方がよく實るといふ。又農業のみの方ではないが

初午の祭も一般に行はれてこの時にも團子を拾ひ合つたり。吠を引つ張り合つたりして色々力で以て占をすることが一般の祭のものと、なつてゐるのがある。又力のみでなくある地方では粥占といふのが行はれる。粥の中に竹の筒を入れて筒の中に入つた小豆の數で豊凶を占ふのである。又熱田の鳥の神事、伊勢の柏流なども占の一種で之れ等の原因から國民祭の一種が生じて居る。また探湯といふのは悪い汚れがある時は今年の實りがわるいと神罰の意を含んで居るもので、今迄述べた占とは少し種類が違ふが、矢張り國民祭の一部として残つて居る。尙ほ一つ惡戯に類した占の法がある。伊勢の山田の「ツト入り」などは之れであつ

て、變装をして何處の家へでもツト入つて自分の好きなものを見るときいふやうな風。又早く禁せられたが以前正月に行はれた水打みづうち、粥杖かゆづえの風習その他之れに類したるものが地方には痕跡を存するものが多い。これは一見惡戯の様であるが、實は祝の意を含んで居るのである。また削掛けりかけの神事といふのも處々に行はれるが、祇園で行はれるのは大晦日の晩に火を消して參詣し惡口の言ひ合ひをして一年の穢氣を拂ふ。言ひまけた者は一年中不幸であるといふ。かういふ類のものは今日では只奇らしい風習として残つて居るのみのものがある。今日獨遊にも大晦日の晩に鐘がなると町へ出てゆき、人のシルクハットを叩き破る様な事がある。之れ等のもとを考へて見ると、つまり吉凶禍福を占ふのであつて、斯ういふ原因から生じた上代の信仰がもととなつて、國民祭として廣く行はれて居るものが澤山ある。

また茲につけ加へて置かなければならないが、

神に祈る爲めに供物、祝詞などが必要である處から、此の供物の風習だけが今日に残つて色々の國民祭が起つて居るのがある。日本の風では供物には醴、鰯の廣物、はたの狹物、毛のあらもの、毛のにごもの、甘菜、辛菜などを供へる。またこんなきまりきつたものばかりでなく、各地に國民の風習として見るべきものもある。上諏訪地方では蛙を獻げる。また鹿の頭そのの数が妙に七十五になるといふことである。も獻げる。猪も獻げる。今は禁せられたが牛を獻げた地方もあつた。或は動物ばかりでなく人間を獻げるのがある。ある神社では旅人を捕へて獻げる神事もあつた。またある神社では大狙おほぞらに人をのせそのの人は抽籤によつて定める（庖丁）をあてる眞似をしたのもあつた。また鬼の出る祭もあるが、之れ等は所謂犠牲かどうか議論のあることで、こゝでは之れは避ける。ともかくもかういふ様に供物の特殊の風習が奇らしい祭となつて行はれて居るのである。

春は今年の豊作を祈り年中の幸福を願ふためにいろいろの供物を獻げ祝祠を奉るのであるが、秋は感謝の祭で此の秋の時には豊かな満足の歡喜の氣が溢れるて祭の式の後には餘興が盛に行はれる。春祭の後夏の間いろいろ苦心した穀物が稔つた喜びで之も一つに神の賜として大に祭り祝ふ。即ち之れは秋の祭であつて、地方によつては春よりも賑やかであつて、日本中に喜びの聲が満ちる。花車^{だし}も出す。舞樂なども出る。里神樂もある。ともかく秋の祭といふ豊かな一團の國民祭が生ずるのである。

祭の曆によると大體春の祭と秋の祭とが中心になつて、此の間にあるは祈願或は感謝の性質のものである。これから國民祭が多く出来るのである。

三

以上は四季折々のうつりかわりから見た祭の起源の一面であるが、尙ほ朝祭に祈る家族の幸福といふことが、四季は行はれる祭の原因となつて居

る。その著しいものは民間信仰、民間療法といふやうな心の働きから出て居る。先づ一例を擧げると之れは食物に關するもので、或る季節に於て其の時のものを食べる時は邪氣を攘ふといふやうなことがある。又一方には住家の禍を拂ふが爲めである。かういふ點から特に家の祭が多く出来る。

而して其の動機が私の身上に關したことであり、此の方から家々の祭が出来て居る。その種類はいろいろあるが、食物と住居とに關するものをひつくるめて言ふと正月の齒がため、屠蘇白散は一般に行はれて居る。七草なども廣く行はれてある。二月の二日灸、これは食物ではないが徳川時代に行はれた。また初午の時に山の芋を賣るところもある。また繪馬を買つて家の中に置けば年中幸があり殊に養蠶によいといふ風も廣くある。三月には雛まつり、上己の風が雛遊びとうつり變つたので、桃の花、草餅、菱餅、白酒等をそなへ、徳川時代より特に女の子の遊戯となつて主

な家の祭となつた。五月には菖蒲酒、菖蒲湯がある。葵祭の祭は雷よけである。又悪疫よけである。その外新緑の祭は活躍の祭である。競馬がある。菖蒲打ちがある。皆生氣に満ちて居る。この季が過ぎると、六月には六月跋があるが、之れは夏の眞盛故その時の惡氣を拂ふのである。宮中では忌火の御ものを召し上る。民間にも暑氣惡氣攘ひに基いた祭が所在に行はれる。

七月には七夕がある。冷素麵、餅などを食した風もあつた。九月には菊酒、草餅。十月には亥の子餅。十二月には追難の儀式がある。一時衰へたがこれも廣く行はれたものである。冬至にもいろいろの風が行はれる。十二月には御忌火の食事を召す禁中の御儀式は六月と同じである。即ち食物住居の内から其季節にあるものを以て健康を祈り望む事が國民祭の主な原因をなして居るのである。此の外附け加へていふと、涅槃の時にあられ、いりまめ。灌佛には朝早く寺へ甘茶をもらひに行く。

また家の前に長い竿を立て、それに躑躅や石楠花などをさして佛に獻げる。之れ等の風は極く美しいと思ふ。孔子はむつかしいおぢさんと思はれたか孔子の方には、こゝにいふ御馳走はない。尤も宮中には二月に孔子の祭があり儒教が盛になつてから士人の間に行はれたが民間にはない。斯く、食物や花などを獻げ二民の感情を表はす。これが祭の一起原をなして居るのである。四季折々にその家々に行はれる此の種の祭が忙しい冷い人生に豊かな趣ある感じを附け加へることは、その國民でなければ分らぬ味である。

四

以上大體國民祭の起源を述べたが、之れ等の國民祭の大部分が此の後幾多の變遷を経て、遂に徳川時代に五節句となり、また明治初年に之れが廢せられ、今日では國祭日として定まつた公の祭日が出来たが、それでも尙ほ民間では、昔のまゝのいろ／＼の祭が残つて行はれて居る。その發

達の跡を見るに日本固有のもの、外國の風の
入つたもの、或は外國の思想をとつて日本のと
調和したもの等がある。ともかく縦に長い間自然
の影響に基いて發達したものが横に外國の影響に
よつて彩られて、いろいろの國民祭が出来て居る。

又其の中のある祭は早く消滅したのもあり。ある
ものは廣く傳播して國民的となつたものもある。

之れは皆國民の心のはたらきである故に、國民祭
の發達傳播を見ることによつて國民性を見ること
が出来る。即ち話の順序としては、茲に進んで發
達傳播に就いて考へなければならぬのであるが、
その時間をもたぬのは甚だ遺憾である。ともかく
斯ういふ祭の風、かういふ氣分の中に我々は育つ
て居る。一年を十二ヶ月に分つといふのはよそゆ
き月の數で、實はおはぎの月お團子の月だのと覺
えて居る。我々が異郷にあつて故郷の事などを想
ひ起すのは先づ第一にお正月である。お祭りの時
である。これは自分一個の考へかは知らないが子

供の一年の感じといふものは、かやうにして頭に
入れられるので、子供の歴史は斯くて年より年に
と移りゆくのである。もしかういふ空氣の中に子
供が育つとすれば、之等の祭を子供の爲めによい
祭にして行ふ様に考へなければならぬ。英國のこ

とわざにも餘り嚴しくする子供は鈍くなるといふ
ことがあるが之れは考へべきことである。徳川時
代に行はれた雛まつりは女兒の爲めで、端午の節
句は男兒のとしてあつて今は表向きではないが家
の祭として行はれて居る。全體子供の考は祭政一
致である。遊ぶのがその半分の主な仕事である。
斯ういふ遊びの日を子供の爲めを趣深いものにし
てやることは極めて大切であると思ふ。年の始の
正月の祭は國民一般の心に強くしみて居る。諒闇
今年のさびしさを以つて見ても年の祭の氣分とい
ふものを考へる事が出来る。三月の桃の祭。四月
の花の祭。五月の新縁の祭。秋の菊の祭、これは
明治節と一緒にすることが出来る。人爲では出来

るものでないが自然に感じが調和して居る。冬の祭は雪の中にとじこめられ、風が寒いので、家の内の祭が多い。此の季のクリスマスは子供を中心としてをる。サンタクロースなどもだん／＼に外國の者でない日本風の翁になりかけて居る。次の時代には日本固有のものとなるのであらうと思ふ。

更にこれを學年期にして見ると、第一學期には桃、櫻、新緑の祭、第二學期には菊の祭、第三學期は雪の祭である。かくて子供の生活に主なるものは遊戯である。如何に忙しい今の時代とはいへ人々が家の内に、子供の樂しみの爲にその忙しい時を割いて、子供を樂しませてやり度いと思ふ。また大人も働くといふ一面の外に一面には娛樂遊戯といふ事も大切であつて、忙しい劇しい働きの中に寛たりとした趣ある氣品がなければ大國民の襟度とはいはれまい。今日の社會、家庭が一體にかういふ類のことに冷淡であるのは甚だ残念のことに思ふ。

今日はたゞ國民祭の起原に就てのお話をした。起原の中にも、子供の遊の心理的起原と同一のものが數々ある。獨その發達傳播に就て述ぶべきであるが、時を有しないのは遺憾である。此のお話が幸に兒童教育の方面に多少の參考ともならば最佳である。

一面に世の中が忙しくなればなるほど他の一面に靜な趣ある時間を渴望するものである。外國の友人などに比べてどうも日本の友人は激しく働かない。だらしが無い。これでは國民祭もだらしが無い。併し子供には遊びが仕事である。露西亞の友人が日本の家庭には鞭がないと私に申しましたが鞭の願があると同時に、面白い遊びも工夫してやりたい。かういふ氣分の中から次代の國民が知らず／＼の間に薰育されるのであると思ふと、決して閑人の閑事業ではない。

(文責在記者)